
Wesker report is East world

xhanku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wesker report is East world

【Zマーク】

Z1936BA

【作者名】

xhanku

【あらすじ】

クリスに殺された男ウェスカーは、死後地獄に送られるはずなのに転生をしてしまった。彼はそこで何をするのだろうか？

ノリと勢いで幻想入りさせてしました。「めんなさい

駄文です。不定期更新です。主人公が悪役です。最悪の三拍子です。

File 1 (前書き)

ノリと勢いで作ってしまった。『メンナサイ
あらすじで書いたとおり、最悪の二拍子です。

ウェスカーファンや、東方ファンは、ブランクをおすすめし
ます。

「クリイイイイイイイイスツ！！」

私は、かつては部下であり、今はライバルである彼“クリス・レッドフィールド”に向かつて叫んでいた。

現在私は溶岩のプールに入れられてるのに對し、奴はヘリの中だ。正直熱い、多分溶けていると思われるが、ウロボロスの肉体のおかげで多少は保たれている。

多分、もう少しで溶けきるだろう。

そうなる前に、奴を・・・クリスとその仲間を道連れにしてやる。

私は、ウロボロスと融合した腕を、最大限に伸ばし、奴の乗つてい
るへりを掴んだ。

」のまま楽に逃がしてたまるものか！

だが、クリス達はヘリに内装されていた
” R P G - 7 ” を構え、こ
ちらに撃つてきた。

普通の状態の私なら、その弾頭を掴み、跳ね返すことができただろう・・・だが、両腕はヘリを掴んだままである。私は弾頭を正面から真っ当に受け止めてしまった。

その爆発と衝撃により、私はへりを離してしまった。

もうへりは腕の届く範囲にはいない。

私は肉体が溶けるのを感じながら、曇っている空に小さく消えゆく
クリス達を見ながら叫び、溶けた。

これが、私が地上での最後の記憶だ。

あの最後の記憶の後・・・死んで意識が失くなつてから一体何秒く
らいだらうか？

気がついたら悪魔のよつな者に囲まれていた。
デビル

きつとアンブレラのB・O・W生成でも造り出す。いや、想像すらできないほど恐ろしい者が、私を囮んでいた。

「おい、立て、貴様どうやってここに来た?ここは普通の人間」と
きが来れる場所ではないッ!」

普通の人間?・・・ああ、ここに来てから自分の姿を確認していなかつたが、どうやら私は人間の状態のようだ。

「それに、お前の魂がいつまで保たれるか分かったもんじゃない・・・
・とりあえずついて来い! 閻魔様のところまで連れて行く!」

閻魔?それは日本の**大魔王**^{グレートサタン}? なかつたか? それにその**大魔王**^{グレートサタン}は死んだ後の世界にしかいないと聞くが?

そういうば、私は死んでいたな・・・待てよ?ならなんで服装は変わっていないんだ? それには人間の姿のままであるし。

・・・死後には色々と考えさせられるが、答えというものは中々出でこない。

私は考えるのをやめて、律儀に待つていってくれた**悪魔**^{サタン}について行つた。

ついて行つた先には、観光ガイドの日本に、横田でしか見たことのない寺院?というものが建つていた。

はて、私は最後にどのあたりで死んだのだろうか?アジアは広いから、その範囲内で死んだということも想定できるが。

「何をボサッとしてる。さあきて来い!」

死後に考へることとは禁物だな。埒があかない

遠田でしか見てなかつた寺院は、その時点で気づけばよかつたかもしがれなかつたが、かなり高い。

そりこえば、この悪魔達も高いな、最低でも8mか10mはある。

タイラント以上に背が高く、そして力もタイラントの3・4倍はある

るだらう。

なら、もしかして大魔王も高いのではないだろうか？

最低でも50mはあると聞くが。

私はまだ見ぬ閻魔とやらに、期待を膨らませ、悪魔が開いた縦約5m、横約45mの扉の先に行つた。

・・・私の期待通りに、約50m近く大きかつたのだが、その閻魔とやらは、机に突っ伏して寝ていた。

こんな奴に罪だの処罰がなんだのを言われるのか？全く威厳もクソも無いのだが。

「閻魔様！起きてください！なに呑気に昼寝なんてしちゃてんですかッ！仕事中ですよッ？」

「うおーすまない、最近JJ送られる者が少ないからつい・・・

」

部下に叱られる上司か・・・せういえば、クリスがよく新米達に私の愚痴を吐いていたということを聞いたことがあるな。

つづづく嫌な奴だ。

「つー・・・じゃありませんよー全く・・・送られてきた訳ではあ

りませが、ここに侵入した者を連れてきました。」

「んーっと、どれどれー···そこの黒服君か···じゃあちよつ
といひちにある鏡の前に来て、審査をするよー」

本当にこんな奴が閻魔という者なのか?全くカリスマといつものを感じさせないのだが。

とりあえず、指示に従い、鏡の前に行く

···なんなんだ?—この鏡はー私の今までのこと全てが映し出されていいる。

「へー、裕福な暮らしをしていたんだねー···その次は兵隊さん
かー、あれ?兵隊さんから研究員になつて···」

この鏡で、次々と自分の過去を見ていった。

研究員···アンブレラの研究員として色々な物を考えていった。
勿論、兵器として使える物を

途中、”ウイリアム・バーキン”という奴と知り合つたが、奴は一
つの街と共に消え去つた。

私は表面上は特殊部隊、精銳部隊の”S·T·A·R·S”という
ところに所属し

裏ではアンブレラの研究員として活動していく。

S・T・A・R・Sでは、様々な難題を解決していく。

ほとんどの容疑者は、死んだように仕立て上げ、アンブレラ社に貢献するための被検体として回収し。

事件の時には、仲間達の情報を次々と調べた。

稀に、アンブレラの社員が捕まることもあったが、情報の漏洩を防ぐために陰から殺していった。

「ふう～ん、結構酷いことしてるねー。」

私としてはなんとも思えないからどうだつていい。

そんなある日、S・T・A・R・Sに新米がやつてきた。

名を”レベッカ・チエーンバース”と言つひじい。

・・・この新米の写真を、私は事務机の引き出しに隠したのだが、どつかの警察官と大学生にバレてしまった。

まあ、彼女の初任務から、S・T・A・R・Sは変わったのだがな・

人外と戦い、謎の仕掛けを解き、一つの街の滅び行く様を一部始終

見届け、アンブレラを潰しに行動しあじめた。

「なるほど、地獄に異様な魂が紛れ込んだ理由はこれが・・・一応報告しておくとして・・・」

閻魔が私の方を向く

「えー、あなたは、大量の生者の魂を狂わせ、そして魂を造り上げたことや、裏切り、そして

であるからにして、あなたにはある世界に飛んでもいい。」

・・・我ながら隨分と悪いことをしてきただものだ。
数がありすぎて、最初の奴しか覚えていない。

「その世界では、死後も滅ぶことは出来ない・・・いわゆる、”永遠地獄”って奴だね。そこでいつちよ苦しんでうよーだいッ！」

閻魔が、何かの紙?をハンマーのようなもので叩く。

その瞬間、私の視界が真っ暗になつた。

ウェスカーが去った後の寺院

そこで、ウェスカーが消えた後、閻魔は大きく息を吸い

「キャッホウ！これで出世だあ！」

飛び跳ねたりして大いに喜んでいた。

姿の変わらない魂は、非常に稀であるが、それは極端だといつ」と

悪なら悪に極端で、善なら善に極端

これ一人を裁くと、千人分裁いたコトになるので、十分仕事をした
とみなされる。

「ハハハ！これでこんな寂しいところともおさらばだぜ！」

そして、閻魔はウェスカーの名前や、その他色々と書かれている紙
を持った。

「ありがとう…うえすかー君！君のおかげ……で……」

紙を見直した後、閻魔のテンションが下がり、頭の血が引いた。

「し、しまつたあああ！！！送る世界間違えたああああ！！！！！しかも、死後も滅べない世界に送らないで、死ぬことが出来ない肉体を受けちゃったよ！－これじゃ格下げ喰らうじやん！」

普段の言動がおかしいからこいつなつたのかもしれない。閻魔の出世は遠のいた。

File 1 (後書き)

・・・クレームですね？一分かってますよー。（泣）

「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」
・・え？なら投稿するな？

・・・「めんなさー」「めんなさー」「めんなさー」「メンナサイ」「めん
くださいお面くだせー」「めんくだせー」「おひどくだせー」「おひどい
食べたい・・・

File 2 (前書き)

「JRおでなせ」「JRおでなせ」「JRおでなせ」「JRおでなせ」

グロテスクな描画を止めんなさい

食事中、それから虫が苦手（主に食事やG）な人は絶対ブランウザバック！

だが、駄文なのでその必要が無いかもです。『めんなさい』

意識が若干戻る。

背後に土の感覚を感じる。

上半身を起こして、意識を覚醒させ、あたりを見回す。

何も無い地平線

とりあえず立ち上がり、自分の状態を確認する。

・・・それほど姿は変わっていない。変わっているとすれば、感覚だろうか？死ぬ前より楽になつていてる。

他にも色々と見ていると、ホルスターがロングゴートの中に入つていた。

そのホルスターの中には、ハンドキャノンこと”M500”とコンバットナイフが入つっていた。

丁度いい・・・自分の身体の調子を確かめるため、腕の脈の部分をコンバットナイフで切りつけてみる。

・・・死ぬ前と変わっていない、切り口は、切ったばかりなのに、何事もなかつたかのような状態になつた。

つまりは、物凄い速さで再生したということだ。

他にも色々と調べてみるため、今度はその辺を走ってみた。

周りが地平線のため、あまり分からないうが、後ろを見ると見えないとここまで足跡が続いている。

これで確信した。どうやら死ぬ前と変わらない状態で”転生”をやらをしたことに

それなら・・・と、この世界を知るために、散策を始めた。

だが、どこまで行つても地平線・・・

気がついたら、飢えて倒れていた。そこから先はよく分からない

倒れてからどのくらい経ったか分からない。ただ分かることは、自分の意識が戻ったこと

目を開ける。だが、真っ暗。

一箇所光が刺している場所がある。

そこに手探りで向かい、穴を覗く

その穴の先は、知らない森

・・・なるほど、かなり時間が経つたか。

とりあえず、この暗闇から抜け出すために、穴の周りを壊す。

ずいぶんと頑丈だったようで、壊すのに手間取った。

そして、壊した穴から抜け出し、その世界を見る。

・・・一言で言えば、ミクロワールド

ありえないほど巨大な木

3mはあるだろ?トンボのような生き物

そして、5m近くのゴキブリ

「じつやうひの世界は紀元前よりもっと前の世界らしい。

考えに浸つてみると、「ゴキブリがじゅうに戻づいた。

すぐさまM500を構えて臨戦態勢に入る。

「ゴキブリは、いきなり飛翔して、6本の凶太い筋肉で、私の身体を捕まえようと襲いかかってきた。

その間に、サイトを「ゴキブリの頭部に合わせ、少数単位でハンマーを起こし、バレルが逸れないようグリップをしっかりと握り、機械のよつた正確さで、6発全ての弾丸を頭に叩き込む。

鉄の板7枚を貫通する弾を受けた「ゴキブリは、途中で墜落した。

しかし、貫通はしていなかつた。へこんで苦しみでいるよつだ。

すぐさまワッヂを引き、シリンドラーを開けて弾丸を装填する。

そして、凶太い筋肉をガムシャラに動かし、足搔いている「ゴキブリに近づき、頭部のへこんでいる部分に銃口を突きつけた瞬間にトリガーを絞つた。

流石に至近距離で、ダメージを受けている部分に、マグナムという高い威力を誇る弾を撃たれた「ゴキブリの頭には、風穴が産まれた。

だが、流石「ゴキブリ」、頭部が損傷しても、未だに足搔き続ける。

それから數十分、やつと「キブリ」の動きが止まった。

そして、動きが止まると同時に、物凄い食欲に駆られる。

私に、このようなモノを食えと？

アンブレラの兵器である”ブラックタイガーハンマー”や、このような「キブリ」も素手で殺すことも可能だが、食すことはできない。

偏見？知ったものか

だが、どうしても私は人間であるから、欲には勝てず、コンバットナイフを取り出し、凶太い筋肉を抜き取り、食べた。

不味い。だが、食せないわけでは無いので、その一本を全て食べきつた。

食欲はこれ一本で一気に失せた。その代わり、物凄い吐き気に襲われた。

私は木の影に移動し、吐いた。

またすぐに食欲が出てくるかもしれないが、その時はその時で別のモノを探せばいい。このようなことは一度と御免だからな。

そして、先ほどの場所に戻つてみると、アリがいた。

全長30cmのアリが。

「最近は巨大なものしか見ていないような気がするが、氣にする
ようなものでもない。」

自分も襲われるかもしれないから、私はすぐさまその場を後にした。

あれから数百万年くらいだらうか？

自分でもよくそんなことを覚えられたことに関心し、周りの変化に
目を向ける。

最近では爬虫類も出てきて、食の偏見的な問題にはあまり困ってい
ない。

ただ、元があの昆虫達だったということを思い出すと、また吐き氣

が催していく。

あと、最近気がついたのだが、ホルスターに着いている弾薬ポケットからは、一個弾丸を取つても弾が絶えることなく設置される。

これにより、最近の主食の肉となつてゐる恐竜相手には困ら^{ダイン}すにいた。

食べられる肉は、皮膚がそれほど硬くなく、殺しやすい小型のコンプソフトウナグースや卵泥棒、あるいは中型のラブトルなどの肉食竜だ。

草食竜は、肉食竜への対策か、皮膚が堅くて手間取る。

だが、肉は最高だ。

・・・最近思つてきたのだが、私はもはや野蛮人とそれほど変わらなくなつてしまつた。

そんな生活をしていたある日、いつもどおりに適当に歩いていたら、集落のような場所にたどり着いた。

転生から今まで生きてきた中で、このようなことをする生物はまだ見かけていない。

それに、恐竜がいるとするならばまだ人間はいないはずだが・・・

疑問を浮かべながら、集落に入ろうとした。

だが

「そこで止まれ！」

門番のよつな奴に止められた。

「その身なり・・・貴様、何者だ！」

身なり？・・・」の転生からずっと変わっていないロングコートのことか

特に何者というわけでもない・・・なら答えは一つだ

「私は人間だ。それを少し超越しただけだ。」

そう答えた瞬間、いきなり矢が飛んできた。

だが、恐竜や昆虫との戦闘で更に超越した私にとつては、その速度は風船に等しい

その矢を掴み、矢の放たれたところを見る。

そこには、銀髪の少女がいた。

とりあえず、矢を放つたのが少女であることが分かったので、その少女の背後に回り込み、首筋にコンバットナイフを突きつける。

「なツー・ビニ・・・?—貴様ツー・ハ意様を離せツー。」

少女の首筋にナイフを突きつけるまで、私の残像を見ていた彼は、こちらを見ると同時に手に持っていた武器をこちらに向ける。

見た感じ槍のようだが、鋭い先端は無く、穴がある。

門番が来ている物は布に等しいのに、その武器と全然釣り合っていない。

「ほう、離せなかつたら、ビリする?」

流石に道具を扱えるなら、このよくな状況では攻撃をしてこないだろ?。

そう思い、門番に聞いてみた。

門番は、頭に血が昇つていいものの、私が盾にしているハ意様とやらを見て、苦虫を噛み潰したような顔になる。

分かつていてるじゃないか・・・しかし、何故この少女は怯えたり動搖などしていない?

そう思つていると、うなじから電流が流れてきた。

「ぐあッ！」

その衝撃で、盾を離してしまった。

盾は、そのまま門番の元に駆け寄つた。
少女

そこから先は、無数の針が刺さる感覚と

「ハ意様は、まだお若いのですからやついた無理はしないでください。」

「いえ、私はあなたがたを信じていましたので

門番と少女の会話の一部が聞こえて、意識が無くなつた。

なるほど、あの門番の顔は、命令を受けたからか・・・

File 2 (後書き)

「みんなでござんねんあし

ゆ、許してくれたもれえええ！――――――！

Part 3 (前編)

「おおなれこ」「おおなれこ」「おおなれこ」「おおなれこ」
ウースター悪役みたいになつて、「めんなれこ」
「ほどぞん東方キャラ」と干渉しながら「おおなれこ」
なんか色々と「おおなれこ」

目が覚める。今度は知らない天井

思うんだが、毎回目を覚ますと知らない場所つてのは、どうこうなんだ？

とりあえず、上半身を起しつづ・・・としたら、金属の擦れる音と一緒に拒まれた。

何故？首を動かそうにも、首も固定されているためか、動けない
だが、ここがどこかの手術室のような場所だとこことは分かる。

「・・・やつと目が覚めたようね。」

少女の声が聞こえる。

そして、足音が近づいて、少女の顔が視界に入る範囲に入った。

・・・改めて少女を見ると、歳は14か15あたりの顔だ。瞳は黒

綺麗な銀髪をしており、白衣を着ている。

今度は、腕を動かそうと試みる。

が、やはつ同じように指まる

「ああ、動じたって無理よ、何せ何重にも鎖を巻いたからね」

自信ありげに少女は言つ

なるほど、鎖か。なら、と腕に力を込める

すると、グニャっと歪んだような感触が伝わってきた。

「な、なんで?...まだ新しい鎖なのに...」

少女のことは無視をして、できる限り最大限の力を込める。

壊れはしなかつたが、緩めることができたので、脱け出す。

そして、少女を見る。

「あ、緊急事態だわーはやく誰か来てー」

怯えた状態で後退している。

・・・中々に良い表情だ。私はそのままゆっくりと前進する。

途中で少女が「ケた。少女は態勢を整えず、そのまま後退する。

私もそのまま前進する。

とつとつ壁際まで来てしまった。

少女は薄ら涙を浮かべている。

・・・たまらん、このゾクゾクとくる背徳感が。

気が付けば、私は頬が緩んでいたようだ。

「お終いだよ、お嬢ちゃん

そう言って、少女を掴もうとした

が

「ハ意様に触るんじゃねえッ！」

先ほどの門番か？

そういうえば、あの門番も若かったな。19近くだったか。

その門番が、いきなり何かを飛ばしてきた。

・・・弾丸か・・・文明が進みすぎているな

それは、死ぬ前に何ども避けってきた物だ、私は易々と避ける。

「ほう、王子様の登場か。なら私は大魔王だな」

そう言つた瞬間にまた一発撃つてくる。

その弾を避け、”王子様”の前に移動する。

だが、王子様も予測していたようで、発射した後にナイフを前に突き出していた。

「・・・残念だつたな、姫を救出できなかつたようだね」

私が移動している時に、周りを見ていないと思つての行動だらう。

だが、私はちゃんと周りを見ている。その少年のナイフを持った腕を掴み、手刀を喰らわせる。

氣絶をさせるだけだから、力加減はしている。

そして、少年が倒れた。

「私が姫だつたら、このように弱い王子様は嫌だな。」

そいつは、少女に向かう。

「おつと、危ない危ない」

「の舞は危らわない。」

振り返った瞬間を狙つて射撃とは・・・中々やるじやないか
もう一発撃とうとして、引き金を絞る。が

「な、なんぞ?...出でよー出でよー」のポンコツがツー・

決して槍銃が悪いわけではない。ただ単純に弾が無いのだよ。

そして、また近づくと、少女もまた後退する。

「来ないで・・・来ないでよ・・・」

悪いがね、行かないわけにはいかないのだよ。

それまでの仕返しとこつものだからね

頬を緩め、また前進する。きっと少女には、この笑みは死神の笑みと変わらないのだろうな

・・・待て、何かおかしい。

何故この少女はいきなり槍銃を持っていたんだ？

私は、また周りを見回す。

・・・本当に時代に釣り合わない物が多いな。

主に光学迷彩とか

私は”見えないモノ”を殴る。

「ツガあ！」

壁に跡が出来る。

フム、あと3体か

一人がやられたコトで、もうすでに武器を構えている。

すかさず武器を狙い、殴り、蹴る。

武器が迷彩の範囲から外れ、視界に入る。

その後、少女の後ろへと移動し、またナイフを首筋にあてる。

「おとなしくしゃ、そもそもことこのいつの命は無いぞ」

「」の手術室の中にいる奴らの、全ての動きが止まる。

「私としては、」のよつなとじに用は無いはずなんだが……十分楽しめさせじゃったよ。」

やつ置いて、少女を突き飛ばす。

誰かがその少女に向かっている隙に、最初に犠牲になつてくれた少年で開いている扉から、脱出した。

「ハ意様！お怪我はありませんか？！」

突き飛ばされた後、光学迷彩を着ていた一人に助け起こされた。

突き飛ばしてくれた人は、もうすでにそこにはいない。

「ええ、大丈夫よ。それより、そこの少年とあなたの仲間を助けてあげてちょうだい。」

「了解しました。」

その迷彩二人が動いたのを確認した後、突き飛ばしてくれた人が寝ている間に採取したその人の血液サンプルを見る。

あの超人的な身体からは一体どのような物が出てくるのだろう・・・それを考へると、ワクワクとゾクゾクが堪らない。

「私はこれからちょっと用事があるから、あとはお願ひね

「了解しました。」

神童とかいう扱いも、これなら捨てたもんじゃないわね。

あの手術室を抜け出した後、この集落を抜け出す。

後々が面倒だからな

それよりも、集落を抜け出した後、森に入つたはいいが

「ヒヤツハー！飯だア！人間ダア！」

人間の言葉を話す生き物に出会つた。

姿は、無数に手があるのに対し、皿は一つ、口が三つとこの生き物だ。

「俺の飯だ！」

「いいや、僕だね」

「あ、あ？！何言ってんダア？俺が見つけたからオレだろウガア！」

・・・やかましい

その生き物に、ダッシュで近づく

「つか？！…自分から来たぜ？！」

「命知らずにもほびがあらア…」

「でも楽に食べられるね」

向ひつも、無数の手を動かしながら近づいてくる。

そして、触れ合ひこと出来る範囲まで近づくと、向ひつは捕まえようと、無数の手を伸ばす。

「ひつは、それをさせまないと手を切斷するためにナイフを振るひ。

「ギャアア！」

「痛い！」

「ンガアツ！」

切断された時の痛さに耐えられなかつたのか、向こうは手を引っ込め、退散する。

「私から逃げようなどと、許すものか」

その謎の生き物に近づき、じつちを見てきた一つしかない大きな目に、素手を貫通させた。

「Ha! You fail me! (俺をガツカリせんじゃねーぞコラー。)」

Figure 3 (後書き)

なんか「Pマーみたいで」みんなさー

テキストードキュメントからのPマーなので「みんなさー

最後のセリフが余計でしたね「みんなさー

とにかくみんなさー

最後のセリフは5のマーセナリーズから取つてしまふ「みんなさー

Figure 4 (前書き)

「あなたがこいつをやめられない……

やめられない とまらない カー・・・イタタ、痛いです！

」「あなたが」「あなたが」「あなたが

あの謎の生き物を倒した後、私のもといた世界と異なることが分かつたため、この世界に興味を持った。

最近思い出したが、スペンサーの言っていたウェスカー計画・・・あれを引き継ぐと言つたが、それはまだ先のことだ

今はこここの世界の生き物、仮に怪物モンスターと言つておこう。

その怪物について分かったことを述べてこう

一つ、奴らのほとんどは、多くの人間の心境や想像によつて生み出されるモノ

二つ、まさしく化け物、B・O・Wでも歯が立たなそうだな

三つ、知力の差がある。知力が高いのもいれば、低いのもいる。

四つ、自我がある。てつくり、想像などで生まれたから無いかと思っていた。

五つ、上下関係を持つている。知力の低いものは、高いものに従える。弱肉強食というやつだ。

これが、沢山の怪物を倒してきてわかったことだ。

だが、私には及ばない。

奴らは人間を食するようで、私に近づいてくる。これは好都合だつた。

だが、ここ最近は私を避けているのか、中々見つからない。そのせいで大量の恐竜が犠牲となっているのに

そういうえば、あの私を捕まえた少女のいる集落はどうなつてているかな・・・もう数十年は経つてている、試しに覗いてみるか。

なんだ？人々が混乱しているぞ？

何があつたんだ？

「やば……今……で張ら……いた結界……くなつた!」

「ま……の旅……てくれな……かな……」

この距離からでも会話は聞こえるが、途切れ途切れだ。

だが、今まで張られていた結界とやらが消えたようだな。

どおりで初めて入った時は気付かなかつたわけだ。

だが、後の奴はなんだ？ 旅……？

人気の無いところから集落に近づく

「そういうえば、近々妖怪の進行があるって予測されていたな

「そりだな、できればまた誤報であつて欲しいんだが

妖怪が進行していく? ほう、これは楽しみだ。

だが、何故落ち着いている？ 妖怪の進行があるのだろう？ 引っ越し
たり移つたりはしないのか？

私は、こいつらが何故こんなに安心できるのかが分からぬ。

「こいつらは何に頼つているのか……はたまた何を信頼してここまで安心しているのががだ。

「でも、八意様が月に移動するためのロケットを作つてるってな

・・・全くもつて文明が進みすぎである。

「あと、何かの強化ワクチンだつてか？そんなのも作つてるって聞いたな」

何？

「ああ、俺も聞いた。何年か前に来た謎の人間？から取つた血液の・・・さんふあるだつけ？」

「サンプルだよ、そのサンプルで超人化できるとか」

「ほう、ウェスカー計画の手助けをしてくれるとは・・・あの小娘にも感謝しなくてはな

「でもまだ研究段階なんだろ？それにその研究を手伝つた人は帰つてこないし」

「仕方ないや、ここまで生きてこられたのもハ意様のおかげ、なら俺のため犠牲になつてくれたと思えばいい」

「やうだな」

そこから先は、謎の言葉の練習をしていた。

・・・ビリのエイリアンだ？

といつあえず、もしさの話が本当なら、私は神となるための第一歩を進めることができる

早速、その小娘を見つけるために、一段と田立つ屋敷を探した。

「・・・相変わらずだな」

私は今、相変わらず時代と釣り合わない建物の前に立っている。

集落しか見ていなかつたから氣づかなかつたが。

あの集落の奥は、近未来的な街並みとなつていて

これはこれでアンバランスだらう

そして、服装もズボンや服といった感じの格好だ。

そして、この街の中には、ビルのような物が建つていて。

そのビルの名前は「ヤゴコロコーポレーション」によつて、人類を超越したおじさん」ッ！

咄嗟に銃を構えて後ろに振り向く。

だが、そこにいたのは謎の格好をした女性

中心を境に赤と青のパターンな柄をした服装をしている。

だが、私が用があるのは「こいつでは・・・いや、こいつだ。

特徴的な銀髪は、ここに来てからここにしが見ていない。

顔立ちも前よりは大人っぽくなっているな

「自分を害した者に自ら赴くとは、随分と勇敢なものだ」

「あら、やうかしら」

クスッと私を見ながら笑う

・・・あの頃の出来事はトラウマになると戻ったが、ここでのメンタル面は一体どうなってるんだ？

女性は、それよりも、と言つて笑いを止め、真剣な表情となる。

「あなた、何か薬のような物を使つていたでしょ？」

「・・・だから何だ？」

「こつは何をした？」

「今、それを研究してみただけど、すごいわね。もはや不老長寿に近い薬ができちゃったわ」

おかしい、あれは兵器として使えるわけで、決して医療に使えるようなものではなかつたはずだ。

「それに、一回吹きかけるだけで傷が塞がるスプレーもできやつたし」

・・・これは尚更おかしい。緊急スプレーの作成はアンブレラ社秘伝であり、作ることじやそれに至るまでを考えつゝことは無理に等しいからだ。

「・・・貴様、一体何者だ？」

「あら、ただの女性よ？みんなから神童やら天才やうと言われてるけど、大したものじやないのにね」

これがもし本当なら、”アレクシア・アシュフォード”を軽々と超えている。

それに、下手すれば始祖ウィルス・・・トウィルスやGウィルス、はたまたVウィルスも易々と作れるだろう

「ただ、最近になつて、おかしな者が増え始めたのよ

「・・・どんな症状だ？」

かまをかけてみる、もじこれで症状が”あれと同じ”であれば、私は行動せざるを得ない

「あら、私は症状とは言つてないのに・・・やつぱり何かわかるのね」

「いいから答える、知つていても貴様に教える義理は無い」

「じゃあ、私もあなたに教える義理は無い」

「こいつッ！」

「じゃあ、そいつらはかゆみを訴えなかつたか？」

女性がほんの一瞬だけ驚く、だがバレンによつこと、すぐに戻る。

「かゆみの後に高熱を起しして、死亡、そして一時間後に生命反応が消えたはずの奴が再び起き上がる」

今度は、女性は田を見開いてこちらを見る。

図星だな、しかしさか一ウイルスが出来てしまつとは・・・

「ええ、そのとおりよ。その起き上がった者は、突然周りの人に襲いかかろうとしたの」

今もそいついると信じて、気配を探る。

いた、どこかの手術室で解剖らしきコトを行われている。

麻酔を打たれたのか、意識はあるものの、動いていない、それに頑丈な物で縛られている。

「ねえ、聞いてるの？」

「ん？」

そいつと同調しようとしている時に、邪魔が入った。

「そいつは、頭に攻撃したら動かなくなつたのだけれど、これについても知つて『いる』のよね？」

「ああ、知つて『いる』。だが教えない」

女性が睨みつけてきた。正直怖くない

「ただ、教えられる」とが一つある

「何?」

睨みを止めず聞いてくる

「それは、空気感染性は低く、血液感染性の高い病気だということだ。症状は狂犬病と似たような物だが・・・今、症状が怪しい奴を解剖している奴ら。突然奴が起き上がり、そいつらが襲われないと限らんぞ?」

女性が睨みを止めた。代わりに、真っ青になっている。

今だ! その解剖されている奴・・・”ゾンビ”に同調する

「おー、起きろー! 貴様首には何もないだろ? そいつらはまだお前が眠ってると思ってる。今なら食べられるぞ、食え!」

その後強烈な痛みが頭に響くと共に、同調が切断され、赤い飛沫が上がる。

その後強烈な痛みが頭に響くと共に、同調が切断された。

いや、これ以上痛みを感じる必要が無いため、切った。最後まで一緒になる義理は無い

「うーえ？…どうこいつなの？…ねえ…う…」

意識が戻つてくると同時に、女性が持っていた通信端末から断末魔が響く

・・・だめだ、やはりこの感覚も死ぬ前と同じか

頭のにわかん夢の中の痛みのような物に耐えつつ、噛まれた手術医の中の一と同調する。

そこには、少数ではあるが、今増殖を開始している仲間の姿があった。

それを確認した後、同調を切斷し、蒼白となっている女性に歩み寄る。

そして、口へ告げる。

「もう終わりだな、”天才”さん

「八意様！大変です！今すぐこのビルを閉鎖してください…さもな

突然鳴った私の通信端末

意味が分からなかつた。

目の前にいる黒ずくめの彼が目を瞑つて止まつた瞬間に、異変は起きた。

いと・・・

そこから、通信してきた彼女の会話は途切れ、端末が落ちる音とともに、謎の呻き声と液体の落ちる音、肉食獣が生の肉を食べるような咀嚼音、それから断末魔

何が起こうた・・・一体中では何が起きているの?

混乱している最中、目の前の彼が近づく

私の本能が逃げろ!と警報を鳴らす。だが、それとは裏腹に硬直して動けない。

彼がすぐ田の前に来た後、やけに天才を強調して、もう終わりだな」と言った。

・・・そうか、これも彼の仕業だったか。

私は隠し持っていた弓で彼を射ようとしたが、それも彼の手によつて防がれた。

そして、また彼は突然消えた。

今はそのビルの中にいる。女性は外で固まっているだけだ。

「これらを生み出した血液サンプルがあるはずだ。

それを探しに来た。

「どう

私の肉を食べようとして近づいてきたゾンビと言つ

すのと、ゾンビは道を開ける。

「アフリカ支部の時のこと、誰かと話を聞かない奴はないよ！」

襲つてこじよつとする者には、これだけ言つておいて、地下に入る

やはり、私の推測は正しかつたよつだ。

このヤーパロパー・ポレーショնも、アンブレラ社と似たよつなモノであり、裏ではこのようなコトを研究しているらしい。

目的の物を探す。

手術室の中には、どこにもなかつた。

その他の箇所もいろいろと探してみると、とあるサンプル保管室の部屋にあつた。

だが、Tウイルスの他にも、見覚えのあるものがあつた。

「Gウイルス……しかもベロニカウイルスまで……」これはツ！

その中の一つを手に取る。

それは、ウイルス細胞が入つたガラスケースなどではなく、小さな生き物の入つたガラスケースだ。

「……どうやつてこんなウロボロスウイルスを作り出したんだ？」

謎の疑問である。

私の血液サンプルからこれら全てを作り出すなんて、常識を超えて
いるにもほどがある。

もしかしたら、と思い、他にも探してみる。

が、無かつた。

流石にこれ以外のモノは作り出せなかつたようだ。

だが、ウェスカー計画に必要な物は全て揃つた。

あとは優秀な人材を待つのみ。

私は、取れる限りのウイルスを貰つていった。

もつ用が無くなつたから外に出る。

ゾンビ達はいつの間にかいなくなつていた。

そして、ビルから少し離れたところで、もの凄い轟音が響いてきた。

なにかが宙に向かつて飛び立つている。ロケットだ。

その近くには他にあと2本の煙がたつてているから、3本目だらう・・・
・その発射地点に向かつ。

発射地点付近には、少量の怪物がいた。

思わず頬が緩む

やつと見つけた

向こうも、こちらを見つけたようだ。

だが、こちらを見た瞬間に逃げ出した・・・何故だ?

だが、逃すわけにはいかない。コンバットナイフを装備してそいつらの退路に移動し、中枢部を抜き取る。

中枢部を抜き取つたら、食す。

抜き取られた妖怪は、力のない人形のように崩れ落ちる。

この中枢部を食すと、最初は激しい痛みに襲われるが、後々力を得ることができる。

そういえば、妖怪が進行してくるんだってな
楽しみだ。

File 4 (後書き)

キャラが崩壊しちゃつてます。

ウェスカーさん大量虐殺です。

いつもグダグダでごめんなさい

なんかいつも謝ってばかりでごめんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1936ba/>

Wesker report is East world

2012年1月5日21時52分発行